

補綴と補綴観

神山四郎著『歴史と歴史観』 の歯科学への翻案

H6.6.22 永田和弘

まえがき：翻案の意義

歯科という世界を選んだ若い学徒にぜひ聞いて頂きたいことがある。それは「歯科という世界が素晴らしい世界だ」ということである。諸君の中には本当は歯科学ではなく美術を専攻したかったという人がいるかも知れない。いや、経済学を、法学を、心理学を、言語学を、哲学を、はたまた、工学を、建築学を本当は専攻したかったという人がいるかも知れない。そのような人に聞いて欲しいのである。歯科学はまさにそのような人々の才能を必要としていることを。

「全ての道はローマに通ず」が私には「全ての学問は歯科学に通ず」と読めてならない。また、医学で全身を語ってもなんの変哲もない話であるが、歯科学を通して全身が見えてくるとか、人間や社会が見えてくるといって歯科学が妙に新鮮な学問となってくるのではないか。歯科学を医学に似て医学にまだまだ至らざるものに墮さしめてしまうか、医学に似て医学の枠組みに捕らわれず医学を越えるものに昇華せしめるかは諸君の歯科学という学問に対する姿勢にかかっているのである。

では他の分野の学問がどの様に歯科学に開かれているのであろうか？ 断わっておくが経済学、政治学等が歯科学に開かれているというときそれは”歯科経済学”や”歯科医療行政学”を意味するのではない。例えば、経済学が歯科学に開かれているという場合、その開かれ方とは「人間社会のなかで雑多で因果関係の入り乱れた混沌とした経済現象にどの様にメスを入れたらばこそ経済学の対象となし得るほどの体系に持ち込み得たかを知ることは、歯科学の学問の枠組みを反省し、口腔の諸現象にどの様に対応すべきかの手がかりになるのではないか」という開かれ方なのである。

「法が習慣習俗の相違の故に如何に多様を極めようとも法は決して気まぐれではない」（筆者註：ある文化圏では是とされたものが他の文化圏では非とされることがあるがそれは法の気まぐれのせいではなく、それなりの法の歴史的背後や習慣習俗の特殊性が現れていることを見逃してはいけない）これはモンテスキュー『法の精神』の書き出しである。これは私には「歯牙の欠損が個人により如何に多様を極めようとも欠損は決して気まぐれではない」（歯牙の欠損の仕方は患者により実に様々であるが欠損は決して気まぐれではない。欠損するにはそれなりの背後なり、理由がある）と読める。

ある学問の考え方を他の学問に翻訳（翻案）することは楽しい知的ゲームである。言語学者の R. ヤコブソンの講義を聴講した人類学者レヴィ＝ストロースは音韻論から構造人類学を創始した。ヤコブソンの『音と意味についての6章』の序文がレヴィ＝

ストロースにより寄せられている。その中でストロースは次のように述べている。「ヤーコブソンが音声学について言ったことは、必要な変更を加えて、民族学にもまたよくあてはまった」と。

もとより、個々の学問には各々の特殊性があり、どんな学問でも必要な変更を加えれば歯科学にもまたよくあてはまるという訳にはいかない。ある場合は無意味なパズルであり、ある場合は強引な歪曲となる。しかし、レヴィ＝ストロースが興奮気味に語ったように、その学問の枠の中には多分絶対に得られないようなヒントのようなものを 他 の学問分野から着想させてもらうことは無上の喜びとなるのである。

E. フッサールの「現象学の理念」やニーチェ「悲劇の誕生」は私に歯科補綴学の変革をもたらした。是非その歯科学への翻案の成果を公にして批判を仰ぎたいところであるが、いかんせん筆者の力量不足と時間不足は提示出来る形になし得ないでいる。内容が濃く、且つ無理せずに転換できる文献を探していたが「歴史と歴史観」(神谷四郎著)が目にとまった。原文を出来る限り原型で残し、私が原文のどの部分をどの様に転換したかを読者にわかるように翻訳してみた。盗作と言えど盗作そのものである。私の名誉のためにもどこからヒントを得てきたかを完全に隠して、翻案ではなくあたかも私の独創であるかのようにして原著として提出し、翻案をしたことの痕跡を全く消し去ってしまうことは容易なことであったが、敢えてそうはしなかった。原文と並置して、歯科学に新しい光をあて、そして若い学徒に歯科学以外の専門書を読むことの必要を訴えることが本稿の目論見だからである。歴史家ランケや文明史家トインビーが歯科医であったならばどの様に歯科学を見、考えたであろうかを空想するのも又面白いではないか。

筆者の最も恐れることは盗作という罪に対してではなく、筆者の浅学故に理解を誤り、無理な転換から、原典の著者が意図していない翻訳になってしまった部分が多々有るのではないかということについてである。もとより翻訳結果が非難されるべきものであったとしてもそれは原典の著者の責任ではなくひとえに筆者の責任であり、一方翻訳結果に光るところがあったとしたらそれは原典の威光の反映である。

この翻訳は先ず、「咬合と咬合観」が考えられ、次いで「老人咬合と咬合観」が考えられた。それぞれに興味あるヒントが得られたがここにはその一部分だけを示し、全文転換としては「補綴と補綴観」を提示させて頂く。一つの原典から様々な転換が可能なことを見て欲しい。

読者は先ず、神山四郎先生の『歴史と歴史観』を読み、次いで翻案：『補綴と補綴観』を読まれると良い。この試みは、必要なのは「理論」の修得ではなく、理論を創造する「姿勢」を修得することであることを明白にするであろう。そして、私の翻案を通じて神山先生の哲学的側面が一層明瞭になるのではないかとひそかに期待をしている。というのは、私の翻案が形を変えた『歴史と歴史観』への読後感でもあるからである。

なお、神山先生の『歴史と歴史観』が掲載されている『歴史』は通信教育用の

教材で一般には市販されていない。私の場合は、小平市立中央図書館で偶然に目にしたが、このような重要な論稿が一般に入手し難いのは誠に残念であり、また、今回の試みは併読しなければ意味がないため、神山先生の『歴史と歴史観』を全文ではないが、併せて掲載させていただく。本稿の試みが盗作や無断転載など著作権の問題に触れるため、読者にはこのことに御理解と御寛容をお願い申し上げる次第である。

翻案：補綴と補綴観

歯科補綴学を学ぶにあたって、まず「補綴とは何か」ということについて明確な観念を持つことが望ましいが、これはそうたやすく得られるものではない。むしろ補綴学を勉強、実践していくうちにわかってくるものかも知れない。しかし、臨床の学問であるからにはこれから補綴学を学ぼうとする者は、補綴にまつわる事実、中でも咬合とは何かとか、その事実と補綴を実践する歯科医とはどういう関係にあるか、ぐらいの基礎的な知識は予め持っている必要がある。なぜなら、補綴学を器用さですませたり、単純に欠損の穴埋めという程度の学問だと思っているとすると、補綴学の一番大事なところを見落としてしまうからである。補綴学は欠損を修復し、機能を回復することだが、それにはいろいろ考えること、つまり推論をしたり構想を練ったりして生体とは何かということを問うことが必要なのだということを知っておいてほしい。

咬合の再現

「補綴」という言葉は欠損（過去）とその修復（現在）という二つの意味をもっている。補綴学というのはその二つの意味の間を往来する知識の活動である。

補綴家の仕事は失われた咬合を蘇らせることだから、なにをおいてもまずは「その人の本来の咬合ははどうであったかをただ示すだけ」（ランケ）であらねばならない。これは、患者個人の感覚や習癖が無視されたり、義歯の製作術式のスタンダードのみが優先されるというのではなく、患者の咬合が尊重され、咬合の事実を患者の過去にまで遡ってみるという意味ではもちろん正しい。そのことはまさに歯科医がロボットの修復工ではなく、生きた患者に接する歯科医としてのあるべき姿勢だからである。ともすれば歯科学が客観的な科学たらんと欲する余り、多様性に富んだ患者個人の個性、特殊性を軽視してきた従来のある方に対する一つの反省点でもある。

しかし、そのことから、補綴学という学問は「今は失われてしまった患者の咬合を再現する」（ミシュレー）ものだとか、「歯科医は己を消して患者の生体そのものに語らせる」（ランケ）のだと言うとすると、理論的に疑問が出てくる。たしかに、歯科医は「最良の義歯を作成するためには患者の咬合そのものを把握していなくてはならない」という観念はもっている。今は咬合の事実を全部知りえないが研究による説明が進めば、「いまに完全な咬合の再現ができる」（アクトン）と思っている。

このことを一つの考え方にまとめてみると、患者にはその人自身の咬合があり、歯科医はそれを見つけて、あったとりに再現する、今は不十分でもいつかは完全に咬合の再現と記述ができる、そのとき補綴学と最良の義歯は完成する、ということになる。この考え方によると、歯科医の使命が達成されるか否かは患者の咬合にまつわる事実を見つけるか否かであって、いかにあるとうりの咬合の事実をあるとうりに把握し、再現するするかということにかかっているのである。このために、歯科医は咬合の分析をし、記録を採取し、それを元に咬合の再現をするのであるが、この時、何を分析し、

どの様に記録するかが手順として予め定まっているのであれば歯科医自身は単なる機械でしかないことになる。よしんば患者の咬合そのものを捉えようとしたところで「歯科医は己を消して患者の咬合そのものに語らせる」のであれば自分の認識が対象の咬合に対して全く受動的に働いて、過去と現在の咬合への思索は単に現在の咬合を傍観することでしかなくなり、咬合の回復、修復の技工は単なる欠損の穴埋めにしか過ぎないことになる。

何故、患者は咬合を損なうのであろうかとか、欠損はそれを生じるにたる原因があるからこそ欠損したのであり、その欠損という新しい事態は患者の思惑とは別に次の事態を導いていく。場合によっては欠損を修復したことにより、欠損を生じた原因を一層助長してしまい、次なるそして更なる欠損を招来しかねないのである。咬合を分析する場合、重要なことは眼前にある現在の状態を分析するだけではなく、何故現在の咬合に至ったのか、つまり、過去の分析もなされなくてはならないことである。

しかし、ここでも又問題が出てくる。

先ず、現在の歯科補綴学では現在の欠損状況を対象にするのが精一杯なのであって、現在の欠損に至った原因（過去）を解明することや、欠損のプロセスを突き止めそこから次なる欠損に進展させない論理を演繹するのは未だ現代補綴学の射程ではない。現在や将来の予後のために過去を如何に判断するかという領域はまだ今日の補綴学にはないのである。患者の過去の咬合の把握はもとより現在の咬合そのものの把握すら困難なのであって、現時点での歯科学のレベルではかろうじて歯型の模型と制限付きの顎運動を知ることしかできないのである。いわば、生の咬合の模写で辛抱しなければならぬ状況にある。現在のみならず過去までも遡った咬合そのものの全把握などは模写にもせよ夢のまた夢という他はない。

模写の模写

患者個人の咬合をあるとりに記述（記録）または再現するというが、それなら患者の咬合そのものをわれわれはどうして知ることができるのだろうか。

先ず、患者の過去の咬合は知ることができるのであろうか？

患者の過去の咬合はもうない。あるのは対合歯に残された咬耗、長年に亘る咀嚼習慣によるものであろう歯軸、歯槽骨や歯肉の形態変化など過去の咬合はこうであったであろうと推測される証拠があるだけである。過去の咬合やその変遷を「患者の咬合をして語らしめる」というのはどだい問題にならない。

では、現在の眼前の患者の咬合を模写することには問題はないのであろうか？

一見したところ変化が無いように見える咬合でも微視的にみれば咬合は常に変化をしている。適応変化である場合もあれば病理的変化である場合もある。ましてや、中年以降ともなれば大方の人々は顎関節に咬合からの影響を受けており、関節円板変形や萎縮をしている。そのために顎頭を正常な位置に誘導して数分もその位置で咬合させていれば数時間は嵌合位はその新しい位置を保つのである。咬合の模写と

いっても対象が経時的に変化するものであり、与える条件により即時的にも変化を
てしまうものであれば一義的に模写しきれものではない。「患者の咬合をして語らし
める」と言っても患者の咬合は自らが顎関節に異常があることを語り、露呈させるこ
はない。歯科医が顎関節に異常があるのではないかとことさらに疑いをかけて咬合に
ある種の条件を負荷させることにより初めてその事実を露呈させるのである。「咬合は
常に自らを語っている」のではないのであって「事実は歯科医が訪ねてくるときにだ
け語るのであり、どの事実発言権を与え、どういう順序と文脈によるかを定めるのは、
補綴家である。.... 補綴家の解釈から独立して客観的に存在する咬合論的事実の
堅い核心というようなものを信じこむのは、前後を顛倒した誤りである」(カー) ので
ある。

咬合の事実の模写とはいっても思った以上に困難であり、過去の咬合同様、現在の
咬合も「患者の咬合をして語らしめる」はやはり問題にならないのである。

では咬合の事実をどうやって我々の認識の中に取り込んでくるのであろうか？

眼前の患者は我々 歯科医の前でカチカチとかモグモグとか咬んでみせるが、如何に
確かに眼前に咬合があると言っても歯科医の網膜に映っている間は咬合の映像その
ものは咬合の事実ではない。網膜に映っているものの中からどの部分を意識の中に
取り込み、意識の中に取り込んだものの中からどの部分を記述したり写真または咬合
器へのトランスファーとして切り取ってくるのか。いわゆる咬合の事実はこのような
歯科医の意識上の手続きを経て初めて咬合の事実となるのである。つまり咬合論的
事実とは歯科医の認識が関与する以前の現象としての「もの」ではなく、歯科医の
認識が関与してはじめて人々の認識の対象となる「こと」となる。歯科医が何に
関心を寄せるかにより、眼前の咬合現象から切り取ってくるものが異なる。歯
科医の認識の行為がもたらす所産が咬合の事実である。この咬合の事実を組み立
てて生の咬合に限りなく近づけて咬合を再現させようとするのが補綴家の仕事な
のである。再現された咬合が切り取られてきた咬合の事実を元に集積され、作成さ
れるのであれば再現された咬合は模写による模写と言うより他にない。

推測科学

病気をして病院へ行くと過去の病歴（既往歴）を尋ねられる。欠損のある咬合を
扱う場合においても咬合の既往歴を問診することは重要である。現在の咬合の性
質を知るためには現在に先立つ過去の咬合を知る必要があるためである。現在の
咬合論では余り重要視されていないが、現在の咬合に修復を加えようとする場
合はなぜ現在の咬合になったかという既往歴を知る必要があるためである。

補綴する場合単に、現在の咬合に調和させるだけではない。全体として崩壊し
ようとしている傾向に調和させかねないからだ。修復処置がかえって崩壊の手
助けになってはいけないからである。であれば、現在の咬合が崩壊の傾向にある
のか、健全恒常の状態にあるのかは現在に対する解釈の問題となる。この眼は
自然科学の

眼ではない。現状をいかに見るかという経済学や政治社会学の眼である。これら人文科学が常に過去と関わらせながら現在を見るように、欠損を来たした咬合もやはり、過去とかかわり合いを持たせながら現在の咬合を見なくてはならないのである。では、過去の咬合を見る眼はどのようなものであろうか。

今はもう失われてしまった過去の咬合は、過去の咬合の痕跡を通してしか知ることができない。前述したように、欠損歯の対合歯に残された咬耗の後とか、歯軸傾斜や顎堤の左右差、時には歯槽骨や歯肉の形状が手がかりとなるだけである。ましてや、欠損部が修復されたりしていると過去の咬合の解読ができない場合がある。欠損部とは関係のない部分であっても治療、例えば充填、が加えられているとその処置が現在の咬合に大きな影響を与え、過去の咬合の推察を大きく困難にしてしまうのである。また、欠損の原因が連綿と今日にまで続いている場合もある。たとえば、右の臼歯部の欠損の原因は右の臼歯部にあるとは限らない。左の臼歯部での嚼が困難なため、右だけの偏側咬みが続いたためにことさら右の臼歯部のみが損壊されてしまった場合などである。そして、例えば、その場合なぜ左の臼歯部での咀嚼困難を来たしたかという右の智歯の平衡側接触があるとか、左の臼歯部に違和感のある金冠がしてあるために生体が左で咬むことを避けたとかである。

しかし、これらのこともあくまでもその症例に限った推測と解釈なのであって自然科学者がするような一般論としての実証はできないのである。いずれにせよ、補綴学がいかに自然科学の体裁をとり、精密科学技術で身を固めようとも、臨床の場で実践に踏み込んだ途端に要求されるのは推測と解釈の技術（ピレンヌ）なのである。「補綴学は個別的な症例と一般的な咬合論的事実との関係を問題にする。歯科医師が両者を切り離したり一方だけを優先させたりできないのは、事実と解釈とを切り離せないのと同じである」（カー）。「事実が事実となるには人間行為の手が加わっているのであって、この行為がなかったとしたら、事実は事実となっていないだろう」（トインビー）

資料の吟味

事実とはラテン語の「ファクタ（作られたもの）」が意味するとおり人の行為が関与したものである。手が加えられたという意義をはらむファクタの代わりに資料「データ（与えられたもの）」を使用したとしても実は意義的には余り差はない。与えたのが人であることを考えると、資料としてどの様に与えられているかを歯科医は責任と慎重さを持たねばならないからである。

古代ギリシアのヘロドトスは HISTORIEI（history は研究を意味する）を著し、「歴史の父」と言われている。というのも、「通説」が真であった時代に、その著作の中で自分で調べて真としたもののみを自分の名でもって真とした姿勢を貫いたためであり、またその姿勢により最初の科学者ともされている。

歴史のみならず科学の最初が「事実」「資料」へのこだわりであったことは、我々の歯科学にも大いに反省が促される所である。

資料は必ずしも事実をありのままに現しているのではない。だいいち記録された資料が全部使えるとは限らない。記録には誤りもあり偽りもある。だから歯科医・技工士はその資料が信用できるものかどうか、その資料の製作者、製作のされ方、目的などを確かめてみなくてはならない。資料の吟味が第一の仕事である。しかし、それによってこの資料が信用できるものだとしても、それですぐ事実（咬合）が知れるものではない。咬合の印象模型を初めとする資料は事実（咬合）のすべてを語っていないからである。それらが提供する情報はいわば「点」であるから、それをつなげて「線」にしなくてはならない。吟味された「点」を統合させて事実を組み立てていく行為、どの資料を取捨選択しどの資料とどの資料とを結び付けるか、は単にハサミと糊でできる仕事ではない。

資料の解釈

また資料は人が記録したものであり、人には各々の立場があるから、どの資料もその人の立場からのものであるという限定がある。20年も昔のことである。科学的、客観的とされたナソロジーが提供した種々の資料は当時の学説の立場に固執し過ぎたとして現在ではその資料を字句どおり受け取る人は少なくなってしまうたという例もある。一つの資料は常に一方的である。それが正しいとしても別の立場はある。記録等の資料にはその採取方法やその意義などに多くの人々ないし、学派の意見が入っている。観察には意見や価値評価が入り込んでくる。また、意見や評価には誤解がつきものである。歪曲や誇張さえある。だから、歯科医や技工士が咬合の真相を知ろうとするためにはその資料の偏りを修正しなくてはならない。しかし、その場合、当の歯科医や技工士もまた立場を持ち意見をもつものであるから、一方的であり偏りをもたぬという保証はない。これに加えて最近新しい学問動向が始動し始めている。建築でいえば、設計者主導であった建築が住居者主導に変化してきたように、咬合論も患者主体の臨床咬合学の重要性が叫ばれるようになってきたのである。歯科医が如何に咬める義歯であると言っても、患者が咬めないと言うのであれば、その義歯は咬めない義歯であるとする立場である。このように患者の立場からの意見を取り込んでくれば、何をその患者の真の咬合とするかは更に難しいものとなる。ただ思考の論理だけは公平公正である。

結局補綴家はその咬合に関わる他の資料や患者の感想や感覚等をいろいろ突き合わせて、論理的に偏りを修正しながら、妥当な見解をつくる。これが咬合の解釈という仕事である。その解釈が資料の裏づけや患者からの了解と納得があったとき初めてその患者の咬合として確定するのである。だから咬合学的真とは資料の読みと患者理解の合理性であって、もしこの合理主義の体系が崩れれば臨床咬合学の体系も崩れてしまう。

そうやって補綴家はたくさんの資料を参照しながら事実を組み上げ一連の脈絡のある咬合像をつくる。しかもこの咬合像は精密な生の咬合の再現にとどまらず、現在の

咬合に推移し結着した「わけ」が語られなくてはならない。それは因果的な解釈というもので、補綴家にとって事実を突きとめるにもまして大事な仕事である。

例えば右下の臼歯部が痛いという症例があったとしよう。先ず最初に疑問にしなくてはならないのは何故痛いのであろうかということであろう。疼痛の原因は虫歯か歯茎の炎症であったとする。疼痛の原因が判明したとしてもその原因である虫歯とか歯肉の病変が何故生じたのであろうか。生じたとしても疼痛を生じるほどに停止しないで何故進行してしまったのであろうか。虫歯にせよ歯肉の病変であるにせよそこまで損壊してしまったのはその歯の使い過ぎであるだろう。では右下のその歯だけが何故痛みが出るほどに偏って使用されたのであろうか。本当に治療しなくてはならないのは左でも安心して咀嚼できるようにすることではないか。左の臼歯部はどうなっているのであろうか。左では咬みづらい状況があるのではないか。そういう眼でみれば左に治療されている歯があれば気にはなる。探りをいれてその歯はいつごろ治療したのかとかその歯で咬んだときに違和感がないかとか問診したくなる。多くの場合は患者自身が違和感を持ってない場合が多く、診査の結果当たりが強すぎる場合にはわずかに削合して咬合を調整すると初めて噛み合わせが楽に自然になったと結果として違和感のあったことを認めてくれる場合もある。この様な場合には左側の治療歴が重要になるのである。

引例がずいぶん長くなってしまったが、咬合が因果のつながりで語られる場合は既往歴的に考察されることが多い。

治療歴と因果関係

しかし、咬合の考察において治療歴や歯牙歯肉並び身体の諸現症の推移は必ずしも因果関係を示してはいない。因果関係とは現症と過去の状態とを高い確率で結び付ける論理の糸である。それが多くの場合時間的前後関係を伴うにしても、論理と時間は別である。だから時間的前後関係があるからといって因果的であるというわけではない。因果を決めるのは論理であって、論理は補綴家の頭の中にある。

我が国において1960年代に頭痛やめまい等の全身症状と咬合とを結び付ける歯科医はいなかった。1980年代も後半になってから頭痛・肩こり・腰痛・手足のしびれ・かすみ眼・耳鳴りという日常的な全身症状が咬合と関連させて注目されるようになってきた。まさか思いもしなかったこのような症状が歯科治療の後、直後ではなく、半年から数年後において生じてくるという因果関係に気がつきだしたのである。全身症状と咬合との因果の関連づけは歯科医の”気づき”に託されている。歯科医の”気づき”こそが相互に無関連に見える意識されざる雑多な諸事象から意識された因果関係へと転換が計られていく。因果関係があるのではないかと思われだすと例えばその肩こりはいつから始まりだしたか、それに先立ち歯の治療を受けたことがないかなど時間的関連が逆探知されていく。歯の治療だけではなく精神的なストレスからくる噛みしめや事故・病気など身体上の大きな変化等も咬合に変化を与えるものとして

逆探知の対象となる。現在の全身症状の原因を逆探知するために、咬合がどのように育成されてきたかをも問診の対象となり、患者の幼少時代の育てられ方にまで原因を遡る場合も少なくない。因果関係が時間的前後関係を伴うことがあったとしても時間的前後関係が因果を決めるのではなくて、因果の論理が時間的前後関係を決めるという由縁である。

咬合が全身症状の要として立ち現れた今、”咬合とは何ぞや”は単に顎の運動論だけでは済まされない対象となってくる。ではあらためて、咬合はどのようにして探求されるべきかを問うて見みよう。

知的に練られた巧みな処理

こうしてみると、咬合は事実が語るのではなく補綴家が語らせると言うべきではないか。「事実は歯科医が訪ねてくるときにだけ語るものであり、どの事実は何を発言させ、どういう順序と文脈によるかを定めるのは、補綴家である」というカーの言葉を思い起こしてみよう。「事実を見る前に（それを事実化した）人を見よ」（カー）というわけである。このことをもう少し強調していえば「咬合の事実は補綴家が作るまでではない」（ベッカー）ともいえるし、「補綴家は自分の考えによって自分の事実を作る」（カー）とさえいえないではない。この言葉はかなり主観主義的に聞こえるが、1950年代の多くの補綴家もっていた咬合の再現願望、咬合論的事実の発見レースという偽客観主義よりは真実に近い。

この主観論と客観論とにけりをつけるかのように、フランスのマルーは、今まで補綴家が正しいと思っていた咬合の概念は実は「比喩」でしかなく、本当は咬合は究明され再現されるのではなく、「補綴家の思惑に転移」されるだけであり、そのさいさまざまの「変形」を受ける。だから咬合にまつわる事実はその事実を事実化した補綴家により、「知的に練られた」「巧みな処理」なのだと言う。この言葉は微妙だが咬合論の本質をついている。

咬合の主題

ではその「知的に練られた巧みな処理」とはどういうことか。補綴家がまずしなければならない処理は彼がこの患者の咬合はこのようではないかとした推測を裏づける資料の読むことであり、扱うことである。いや、その前に個性ある患者の咬合を推測できるかどうかである。次いでは何を目的として、どのような意味をもたせて、どのような方法手段で眼前の患者から咬合の資料を引き出せるか、そして、引き出した資料が読めるかどうかである。読み方や扱い方は前もって手順として与えられているというものではない。まさに、補綴家の判断と考察のもとに患者の咬合の諸現象が事実化されていくのである。「知的に練られる」とはまさにこのことを指すのである。「巧みさ」とは補綴家が事実としたものをどういう角度からその患者の咬合としてどう構成するかである。巧みさとはその構成のうまさである。

知的に練られた事実を巧みに構成していくとき補綴家は「写真」のように事実を無限に集積して咬合を表現するのではない。第一それは不可能なことである。事実といってもほとんど無意味な事実もあれば見逃してはならない重要な事実もある。これらの事実の序列の中から補綴家は限られた事実を取り上げて咬合論を構成していくのである。ここに「どういう方向に構成していくのか」ということが重要であることに気が付くであろう。この方向は「主題」といわれる。では、この咬合の「主題」はどこにあるのか。それは資料そのものの中にはない。これも補綴家の頭の中にある。補綴家に有意義な事実を取り上げさせるものが彼の主題である。だから主題は意味のない事実を捨てさせる原理でもある。咬合論は本来的に選択的な有意義な事実の観察であり、叙述である。

たとえば、いままでに「咬合」という表題の本がいくつも書かれたが、それは咬合にまつわたることがすべて洩れなく書いてあるのではない。このことは単に事実が選択されているというだけではなく、事実の共通言語化ないし共通概念化が行われて事実の単純化がなされているのである。例えば、“天然歯の咬合面”という場合は典型的な10代か20代せいぜい30代の咬合面が“天然歯の咬合面”として概念化される。しかし、ひとたび概念形成が確立してしまうと50代以上を対象とした総義歯の咬合を扱う場合においてすらその咬合面に20代の咬合面をもって概念処理をしようとする。老化した咬合面形態を理想としない、最適としない補綴学の既成概念から出た結果である。

咬合は青年者だけのものではない。小児は小児なりの咬合があり、老人には老人なりの咬合がある。「小児から老人に至るまでを貫く咬合の本質とは何か」。これは青年者の咬合を前提にしている視野の浅い従来の「咬合とは何か」とは明らかに異なる。視野の枠を浅くするかそれとも深く絞り込むかにより選択される事実は異なるであろう。更に、前述したように、咬合は全身と深く関わっているが咬合を全身と関わらせて叙述するかどうか、つまり、視野の枠を広く取るか狭く取るかでもまた選択される事実は異なるであろう。この枠は補綴家により、また同じ補綴家であっても叙述する目的により異なる。大枠の主題もあれば、小枠の主題もある。いずれにせよ、補綴家は自分の主題を持たずに咬合にアプローチすることはできない。

客観的な概念と思われていた「咬合」がこの様に実は叙述する補綴家の「主観」に大きく依存していることを見たであろう。患者の個人咬合の歴史を現在の咬合にどれぐらい関わらせるか、全身の諸症状のどこまでを咬合と関連づけるかで選択される事実の範囲が決まり、それをもとに咬合をどのような方向に叙述するかが決まる。補綴家をそのような作業に導く主題を含めて、補綴家に資料の操作を命ずる指導原理を一般に「補綴観」という。それは一人一人の補綴家が持っているものであり、持っていないとてはならないものである。

すべての既往歴は現症である

補綴学は単に欠損した部分を補填して形の上で全歯を咬み合わせればよいというだけの学問ではない。むしろ、何故欠損に至るのか、咬合の不正はどのような結果を生体全体に招来するのか、だから咬合を修復するにはどのように修復し、どのように修復してはいけないかを探る学問である。

ここに、修復しなくてはならない現在の咬合があるとしよう。この咬合の過去の咬合はそれ自身が現在の修復すべき状態に導いたものとして、善きにせよ悪きにせよ修復のガイドラインを内在している。修復される対象は現在の咬合であるが、その修復像を導くのは過去が内在しているガイドラインである。この意味では補綴学は過去の咬合を読み解く学問であるといえることができる。現症を読み解くのに、現症を如何なる既往歴と結び付け、結び付けた既往歴からどのようなガイドラインを読みだしてくるかは現在の補綴家の既往歴に対する関心のもちかた如何である。

選択される既往歴は現症をどう読み取るかにより決まるものであるからイタリアのクローチェのいう「すべての既往歴は現症である」は間違いではない。既往歴に新しい息吹を与えて現在の現症として生きかえらせるのは現在の補綴家である。忘れられ、無視され薄れている過去の既往歴にはっきりした形と意義を与えるのは現在の補綴家である。このような咬合を歴史ある生体として捉える自覚を持つ歯科補綴家 (prosthodontist) は咬合を精密機械のような無歴史的構造として捉える補綴家 (prosthodontics) とは違う。

補綴観の構造

ではその補綴観とはどういう構造をもっているのだろうか。補綴家は臨床的事実を探るのだから事実を公平にみなくてはならない、一党一派にかたよってはならないといわれる。しかしあらゆることを無色透明に見られる人はいまい。人には色々な性癖や好き嫌いの感情があり、信念や信条のような固定観念がある。補綴家はそういう先入観をもって患者を見るから、彼の観察にはどうしても屈折や歪みが起こってしまう。また補綴家には彼の思想や立場があるからものごとを見るのに一定の視角がある。またそれはその補綴家がおかれている時代や学問状況それから医療制度からも制約を受ける。補綴家によっては同じ歯列の欠損を見ても、もし彼が医療費の支払い側で勤務する場合と医療費の請求側で勤務する場合とでは考えることは同じではないであろう。思想が違い立場が違えば見方も違う。ひとりの補綴家が時代の変化、思想の変化につれて、自分の咬合論が変わり臨床での咬合の読み方が変わるということもある。ナソロジーの盛衰の中で思想転向をした補綴家を挙げるまでもなく、歯列矯正学、歯周病学もここ10年間で大きく様変わりしてそれにより歯科医の対応も大きく変わったのである。これらの変化は知識の進歩とか、技術の革新とかのレベルではない。理論(客観)尊重から経験(主観)尊重への学問の構造変化という変化なのである。補綴家の主観と環境の変化のために客観的な学問としての咬合論が一義的に書

かれることはありえない。ましてや、患者の咬合は一人一人が皆異なるため、臨床の場において現実の個人の咬合をどの様に解釈し、診断するかは補綴家により異なつて当然となる。

しかし、この主観尊重の考え方を押し進めて行くと”患者は誰でもどこでも平等に公平な治療が受けられる”という患者の権利に抵触してしまう。つまり、誰でもが受けられるわけへだてのない治療とは治療がある程度客観的であることが前提なのである。科学的根拠のない直感的な治療はしてはならないのである。患者権利の高まった今日、医師の方でも訴訟に備えて客観的なデータなしに診断をしない傾向が強まっている。

科学的知見に基づき科学的解釈と科学的説明によって個性性・特殊性・偶然性の強い患者の咬合治療がなされていく。補綴家の思想が違い立場が違えば見方も違つてはいうものの、そこにはおのずと社会的制約が働き科学的枠づけによって咬合の記述は客観的となる。補綴観は補綴家の主観的思考と彼を取り巻く客観的状況により、形成されていく。それらをどの様に取り合わせるかは補綴家の判断に任されており、各々の補綴家の補綴観に様々な特異性が出るのである。

補綴学と哲学

こうして一つの立場から一つの見方によって一つの咬合の事実が示されたとする。それが妥当な資料の裏づけと正しい説明仮説によって合理的に説明されたとする。しかしそれで咬合の叙述が完了したわけではない。

科学的な説明仮説は有効範囲が限られているから、ある咬合の事実を説明するのに患者の個人的な事偶発的な状況は捨象し、本質的と思われる内容のみを取り上げねばならない。さらにはその内容を個々に砕いて、咬合生理学的にはこう、心理学的にはこう、医療制度や医療経済からはこうと対象を限定して使わなくてはならない。説明の精度を上げるためには対象をますます細かく砕かなくてはならないだろう。最近になって咬合の科学的な研究が進んだのはそうやって対象を細分化したからである。専門領域が絞られていくことは確かに咬合の科学の進展を示している。

しかし、いろいろな要因が重なり合い異質のものが混在しているものの総体についてはどうするのか。細分化して得られた事実を逆に集積すれば総体となるのであろうか？ そこが難しいところである。咬合を論じる上で本質的な事項ではないとされる個人的な偶発的で雑多な現象は最初から事実として拾い上げられないだろう。例えば、右の足首ばかりを捻挫するとか、経営に失敗したとか、学業が不振になりだしたとか、悪夢を見るとか、神経質な性格であるとか等は咬合の研究から最初から捨象されるため問診もされず、患者も無関係と考えるのか歯科医には述べることもない。たとえ患者が主訴の中で訴えたとしても、歯科医師に関心がなければ彼の耳には届かないだろう。実は捨象される上記の症状や事件は咬合に変化を与え、または、咬合の異常が上記症状を発現することが知られてきた。既成の共通概念の中で共通認知された

事実をだけを集積しても総体は現れないのである。

もっと切実な例を挙げてみよう。いかに咬合の研究が進歩しようとも、咬合の治療費を支払えない患者への解答は補綴学からは引き出せないであろう。患者の貧は咬合学の本質ではないからである。しかし、その患者の咬合が崩れる原因は貧困である場合が多い。咬合不全を論ずるに当たり、貧困は学問にとっては本質ではないが、その患者の咬合にとっては本質をなす。本質ではなく気まぐれで雑多な現象として捨象されていた現象に光を当てて本質と深く関わり合うものとして取り上げたとき初めてその現象は雑多なものではなくなるのである。

生の咬合を細分化することは出来るが個々の事実を集積しても生の咬合にはならない。全ての事象に本質の光を照射することができないからである。光が当てられずに省みられていない事実は無数にある。ニュートンは自分を海岸で貝殻と戯れる子供に例えたが、今日の科学にもう少し敬意を表して10,000ピースのジグソーパズルでやっと我々は2,3%のこまを得たところだといったらまだそれでも多すぎるとおしかりを受けるであろうか？しかし、完全にピースが揃うまで待つわけにもいかず、現在の知識でなんとか説明しなくてはならない。

ではどうするのか。補綴家は、そのようなマクロの対象に対しては、たとえ仮説のための仮説であっても、自己の補綴観から一つの仮説を立てて、それによって事実を総合的に判断し全体を診断し、治療方針を決定する。それはもう科学的操作ではない。そういう全体像の構成の原理としては、劇作家がドラマの筋を作り画家が構図をきめるのにも似た「構想力」というものもあるが、科学的説明を含む事実の総合的判断を導く理論的原理はやはり「哲学」であろう。補綴家の主題のいちばん背後には彼の哲学がある。それなしにはマクロのスケールの補綴構成が出来ないとすると、補綴家は不可避免的に補綴観の哲学を持たなくてはならなくなる。

じじつ、すぐれた補綴家は外の咬合現象に向き合うとともに、内なる自己の補綴哲学にも向き合っている。歯科補綴に哲学が必須であるという由縁である。以上の小論もつまりは「歯科補綴学は人間学である。患者を問い、歯科医自身を問う学問である。何よりも哲学的な学問である。」ことを若い学徒に述べたい長い前置きにしか過ぎないのである。

終わり

[研究課題]

(1) 咬合の事実と補綴家とはどういう関係にあるか。

咬合の事実が資料をもとに補綴家の頭の中にどのように作られていくか、その過程をよくつかむこと。

- (2) 咬合理論は書きかえられる、ということの意味を理論的に説明せよ。

咬合の事実は時代とともに知識が変わり見方が変わるにつれて書きかえられる、そのわけをよく理解すること。

- (3) 咬合の記述における補綴観の働きを述べよ。

補綴観の内容をなす先入観と説明仮説と構想力または哲学が、咬合の記述にそれぞれどう働くかをよく見ること。

主な参考書

神山四郎 「歴史と歴史観」(私立大学通信教育協会「歴史」所収)

E・H・カー著 清水幾太郎訳 「歴史とは何か」(岩波新書)

W・H・ウォルシュ著 神山四郎訳 「歴史哲学」(創文社)

林健太郎・沢田昭夫 「原典による歴史学入門」(講談社学術文庫)

神山四郎 「歴史入門」(講談社現代新書)